

結 婚 式

熊川 石 川 定 七 氏 談

明治二十六年生れ
七十八歳

ここに書かれたような式は、ほとんど戦前（昭和十七・八年ごろ）の時代までに、守りつがれてきた型であった。しかし、ごく最近でも、これに近い形式を守っている所も、この近在にはあるようだ。

文中の言葉づかいには、石川さんぐらいの年代の人は、このような仲間言葉で話しあっていたという想定で、筆者が実際の話につけたとして書いた部分がいくつかある。

（記録・山崎茂男）

は し か け

どこそこがいい娘がいるぞ、ということを知ると、「家の息子に、いい嫁を世話してくんねえか」とか頼まれていた人が動き出す。見合いなんていうもんじゃなくて、「おめえ、しらばっくれてあの娘を見にいつてこうよ」ということをするか、ときにやあ写真ぐれえは見る。それから娘のほうへも行つて、「どうよ」なんて、かまあひっかけて見て、話がおっばじまるのよ。

こういうことで動く人を、「はしかけ」って言つてな、はしかけがそのまま話をあんべえよくすすめて、「仲人」になることもある。でもたいていは、おたくさんは昔からのあれがあるべえから、と仲人は別にしてもらうのが多いやな。

口 が た め

そんなことをしているうちに、「くれましよう」「もらいましよう」っていうことになる。日どりなんかきめるつごうもあんから、「くちがため」をしとこう、つてなる。

口がための日にゃあ、酒をさげて仲人とはしかけがそろつていくこともあるが、仲人だけのこともあらあな。まあ、むかしやあ、かたくやったが、ふつうは「はしかけ」ぐれえでぶつくらわしちまうのよ。娘の家では、親と親類の代表ぐれえがたちあつてな、酒をこつとおうすんのよ。その酒をひらいて飲めば、それで固まった。あとはどこから口がかかつて、これで安心つてえことになる。

結 納

結納にゃあ、こっちは仲人と本家のもんとか親類の代表が出かけていかあね。

くれ方じゃあ、酒とさかなは頭つきを用意しといて、まあそこでいっぺえやりながらご祝儀の

日取りをきめちまうのよ。

この日取りについてだけど、易の本を見てな、この中に、結納の吉日、婚礼の吉日というのがあから、それで決めるんだな。そして、お祝いごとは、午前中にかたをつけて、ひるすぎにならねえようにしたもんだ。結納金というのもこの席でとりかわした。

式の日（嫁さんの座敷）

俺がやったあので、一つ向うの仲人がえらくかたくやったあのがあってな、それはこうだ。

こっちの仲人は俺だけど、それと婿さんや親類のもんで出かけたら、まず向うの仲人の家へ寄ってくる、と言うんだな。家へ寄ってもらってから、ご案内しますっていうわけだ。

その時は、こっちからは、酒代と末広に、するめとかつおぶしの折りのようなものを持っていくんだな。ほかに菓子折りもつけるな。

そこへ向うの嫁の方の組合のものがお相伴にきてくれてなあ。それからその人達が、「それじゃあご案内しましょう」ってわけだ。

これはずいぶんかたい話よ。ふつう嫁の家で仲人が待っているな。

そして、嫁さんの家へ着く。

向うの仲人はそこまでやって、あとは組うちのもんが、どんどんやってくれんのよ。それを

“おとりもち”とか“ざへえ（座配）”とか言うが、これはところによってよび方がちがうな。

嫁の家へ上ったら、こちらは家の人へ進物をさし出すんだな。ふつうは仲人の進物を先に出すわけだ。嫁さんの方じゃあ、その進物を「いただきます」って床の間へかざしておく。

向うじゃあもう座敷もできてんから、そこでご馳走になるわけだ。この一座敷がすんでから、「たしかに嫁さんをお願いしました」とあいさつしてひきあげてくる。それから嫁さまの荷物をかつぎ出すんだから、たいへんなことよ。

仲人の婆さんなんかダンスをあけて、ここに何がしまっている、なんて嫁に言うわけだな。それでまわりの人に荷物を見てもらうようになってんだ。そして手車で荷物をはこぶ。嫁さんはたいてい一里や二里は歩ってきたな。

おともが、はさみ箱へご進物入れてかついでな。これも重てえから、途中は手車の上へいっけてもらって婿の家の近くへくるとかついだな。

式の日（婿さんの座敷）

婿の方じゃあ、組合のものが、ちょうちんさげて、つじぐちで待ってて、それが先導して嫁さまの一行を迎えるわけだ。

婿の家のかど口で、麦がらをぶっちげえにしたのを燃やして、それを嫁にまたがしてな、それ

から勝手口でトンボ盃をして、それを嫁が一口飲んでから、お勝手から座敷へあがんのよ。いまのもんは、こういうことをぐでなししたもんだなんていうが、嫁はみんなお勝手からしかへえれなかった。

婿はおもてから入ったな。この座敷へは、迎えに行ったもんより、送ってくる方が多いのよ。人数は五人とか、七人とか、必ず奇数にしたもんだ。そして、婿の家のご祝儀が、おっぱじまるわけだ。もう、そんなときは、たいてい暗くなってたあな。

仲人が世話をやいて、三三九度からやりとりが始まるのよ。それから親子の盃、兄弟の盃、親戚の盃、とやるわけだ。

それから「おとりもち」が口きいて無礼講の宴会になるんだ。

ところによっちゃあ、この間に謡いがある。その謡いをすませてからが無礼講となるようだな。でも、ふつうはこの謡いで始まる座敷にゃあ、めったにでつくわしたこたあねえなあ。

嫁さまは、この座敷の間に、神社と「ぼだい寺」にあいさつにいつてくんのよ。あとはもう、夜中の一時二時まではふつうでな、明け方まで飲んでさわぐな。

婿は中へへえって、酒をついでまわったりしてな。嫁さんは少し奥で休ませてもらうけど、最後に「嫁のお茶」をつぐまでは、本当に楽にすることあできねえんだ。

かたい所じゃあ、この宴席が始まって間もなく、荷受けの盃、っていうのもやるよ。仲人が家

の者へ、「荷物も渡しました」「たしかに受取りました」っていう盃だ。

それから、この座敷のお給仕に、組うちの娘さんたちが頼まれて出ましたよ。娘さんたちは頼まれればだれでも出たな。だけどこのお給仕が大変だった。

着なれない着物の帯で苦しいし、お膳の持ちはこびは目の上の高さにしろとか、畳のへりをふむと礼儀知らずだと笑われるとか言われてなあ。

次の日

次の日は部落中を一軒残らず、おじぎをしてまわるのよ。こんど来た嫁だからよろしくって、近所の年寄りがついて歩くんだよ。それから、濃い親類まわりだ。人力車を頼んでまわれる家なんてえものはめったになかったし、タクシーなんかこの辺じゃあ、かんげえもつかなかったな。新婚旅行なんてえのは、いくんちたっても行けっこねえ。いくんちかして行けたとしても、日げえりで済ませるていどだな。

式のあれこれ

結婚式
座敷の支度は、近所の女衆が出てやったな。そこで使うものは「膳^{べん}碗」の組合があって、その倉に全部そなえつけてあるんだからそれを使うのよ。

ふつうは「ひら膳」でご馳走を出して、高足膳で、うどんそばを出しましたよ。そのお膳をうんと使うから、お勝手のせめえ家じゃあ、ごったがえしちまうわな。

男衆はそういう時は「うどんゆで」でな。でつけえ手で、でつけえ玉をつくってなあ。

おしのぎにゃあ、こわめしをふかして、それに、にんじん、ごぼうや、こんにゃくやきりいかをつけてな。こういう煮つけでもなんでも、みんな組合のもんがやったな。

一晚中飲んでるもんだあから、酔っぱらいにゃあ手こずったもんよ。ぐだあまく奴だの、寝ころがる奴、えんがわへ出て、へどっぱきをするやつもあるしな。てんでに踊りをおっぱじめたりに、仲人はねぶってえのに、目えこすりこすり、朝、顔を洗ってから、嫁さんのお茶を貰ったようなこともあるよ。

いまはまったく変わっちまって、式場でばたばたやって、嫁や婿はその間にさっさと旅行におっぱしちまうだあからなあ。

いまでも「膳碗」の倉には、昔使った「えだる」「やはさみ箱」なんかありますよ。

里 帰 り

式の翌日が近所まわり、そして三日目が三ツ目の里帰りだ。

婿のおやじが嫁さんについて、まず嫁の仲人の家へ行って、仲人礼をちゃんとやってから、こ

んどはその仲人の案内で嫁の家へ寄るのよ。

帰りは、嫁の親がついて、婿の仲人へ仲人礼をして、それから、婿の仲人が一行を連れて家へ帰ってくるちゅうわけだ。

そのあと一週間のうちに、こんどは嫁さんに婿の母親がついて髪洗いに実家へ帰り、これでひととおりが終わりだな。昔の人は、自分の髪の毛でまげをゆったから、こんなことも必要だったんですよ。旅行に出かけられるのもこれからのこつてすよ。

戦前までは、この辺どこの家でもこういうことをやってきたが、最近の十年ぐれえからは、ほとんど式場でやっちまうようだなあ。

ご祝儀がすむと、あとっ腹が病めるって、昔の人は言ったもんだ。ご祝儀借金で苦しんだ家も多かったものよ。思いつきり気張ってかけちゃって、あとに借金が残ってしまうというわけだな。